



社会医療法人 柏葉会
札幌 柏葉会病院
SAPPORO HAKUYOKAI HOSPITAL



〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条12丁目1番25号

病院代表

TEL.011-876-9100 FAX.011-876-9838

患者支援
センター

**TEL.011-598-1777
FAX.011-598-1208**

☎ 診療受付時間 8:30~11:30 13:00~16:00
診療時間 9:00~12:00 13:00~17:00 ※受付時間・診療時間は診療科によって異なります
📅 休診日 土・日・祝日 ※救急診療は24時間体制

標榜科目

脳神経外科、脳神経内科、循環器内科、リハビリテーション科、放射線科、耳鼻咽喉科、
麻酔科（瀧田 恒一）

病床数

病床数167床（一般：69床、SCU：24床、回復期リハビリテーション：74床）

駐車場

37台（南側第1駐車場：18台、北側第2駐車場：19台）

関連施設



・脳神経内科かしわば病院
TEL.011-598-6080



・かしわば記念クリニック
TEL.011-851-2580

介護事業部

・訪問看護ステーションふくずみ TEL.011-855-2933
・ケアプランセンターかしわば TEL.011-855-3031
・デイケアセンター笑るむ TEL.011-850-5041



法人理念
信頼と尊敬の医療

2020年3月に社会医療法人の認可を受け、ロゴを刷新しました。緑色の部分が柏の葉と脳を、水色の三日月で信頼を、紫の三日月で尊敬を表現しました。真ん中の白い丸部分は地球です。世界標準の医療を目指していることを伝えています。ロゴ全体は柏葉会の頭文字Hで、活力を取り戻した人のパワーを重ねています。



SAPPORO
HAKUYOKAI
HOSPITAL

病院案内



人と医療と未来をつなぐ

新しい脳神経外科医療を札幌から



札幌柏葉会病院 センターのご案内 病院を支える4つのセンターの特徴についてご紹介します。

高度脳血管病センター

技術と先進テクノロジーの融合で
脳外科手術の『質』を追求

脳血管の病気は場合によっては人生を脅かしかねない疾患であり、その存在が発覚したときのご本人ご家族の不安は計り知れません。その「心」に寄り添いながら、私たち高度脳血管病センターは治療技術と機器の進歩を常に追求め、何事にも諦めることなく、「質(quality)」の高い治療を患者さんに提供し続けることを、自らの使命であると考えています。

これまで長年にわたり蓄積してきた経験と追及に基づいた「技術」を最大限に駆使して、ITやAIを利用した術前シミュレーションや術中の様々な映像法や安全を守るモニタリングなど、あらゆる先端テクノロジーすなわち「機器」を用いて、最先端の治療を実現していきます。

心と技術と機器の融和、すなわち「心・技・械」の精神で、病気が見つかったかたの明るい未来を切り開く一役を担うこと、それが私たちの本望です。

先端医療研究センター

日々進歩する最先端医療技術を
いち早く臨床に

現在の医療技術は高度に精密化・複雑化しており、その恩恵を最大限に享受するためには「医学と理工学の境界領域の専門知識を持つ部門」の存在が欠かせないとの理由から、札幌柏葉会病院には先端医療研究センターが設置され、最先端の臨床MRI装置、新しい画像技術、人工知能などの迅速な導入を進めています。また、積極的な院内部門間の情報交換無くしては最先端技術の臨床応用は実現しないと考え、疾患の診断、治療から回復リハビリテーションまでを有機的に連携するために、高度脳血管病センターをはじめとする病院内の各部門、診療放射線部門、理学療法部門等と密接な技術情報の交換をおこなうことにより、病院全体として、最先端技術の進歩をいち早く取り入れた脳神経領域の高度な先進的医療拠点を目指しています。

脳血管内治療センター

脳血管内治療と脳外科手術の
ベストバランスを目指して

脳血管内治療センターでは4人の脳血管内治療専門医が常勤しており急性期脳梗塞に対する脳血栓回収療法が24時間体制で実施できる一次脳卒中センター(PSC)コア施設にも認定をうけております。当センターでは脳卒中の代表疾患である脳梗塞や脳動脈瘤に対する脳血管内治療だけでなく脳動静脈奇形、硬膜動静脈瘻、高難易度動脈瘤など脳血管内治療の中でも最もハイレベルなテクニックを要する治療を提供しております。また脳腫瘍に対しては摘出術時の出血量低減、摘出難易度低減を図るため、開頭術前に腫瘍血管塞栓術も積極的に施行するなど外科手術チームとも連携しております。さらに新病院ではハイブリッド手術室を駆使し開頭術と血管内治療の(同時)複合的な手術も展開してまいります。

FUS(集束超音波)センター

「できない」から
「できる」明日へ

自分ではどうすることもできない手のふるえにより上手く字が書けない、箸が使えないなど「できない」ことにお悩みの患者さんがいらっしゃいます。これは振戦(しんせん)とよばれ、多くの場合本態性振戦やパーキンソン病によるものです。振戦は薬物治療が中心ですが、効果が不十分であったり副作用などの問題もあり、継続ができないこともしばしばです。当院では、薬物治療で改善が得られない方の次の一手として新たな外科治療のひとつである、MRガイド下集束超音波治療(FUS)を2021年に開始しました。この治療により長く悩まされてきたふるえが改善し、「できない」が「できる」ようになったとのことのお喜びの声をいただきました。今後も手の震えにお悩みの一人でも多くの方に、「できない」から「できる」明日をお届けできるようセンター一同努力してまいります。

ごあいさつ

2019年に理事長に就任した際、法人のフラッグシップ病院の新築を職員へのコミットメントとしました。病院は社会にとって必須のインフラであり、その重要性はますます増えています。しかし、時代のニーズに応えられないインフラは静かに消えていく運命です。近年、スマホやクーラー、個室などが生活に欠かせないものとなり、医療機器も急速に進化しています。病院の新築には多大な資金がかかりますが、最新の医療を提供するためには必要な選択でした。病院名は“柏葉脳神経外科病院”から“札幌柏葉会病院”に改名しました。病院名に“札幌”を付し国際的な医療を目指す決意を示しています。

また病院名から脳神経外科を外し、神経疾患を診る専門家が集まりやすい環境を整えました。変化する病院ロゴは、時代のニーズに合わせて変化する私たちの柔軟な姿勢を表しています。札幌柏葉会病院は福住地区から平岸地区へ移転し、最新の設備を備えた病院として地域に貢献します。“Think Global, Act Local”のポリシーを大切にし、どのように地域医療に寄与できるか、見守っていただければ幸いです。

社会医療法人柏葉会 理事長
札幌柏葉会病院 院長

寺坂 俊介

■脳神経外科
日本脳神経外科学会専門医 医学博士

Terasaka
Shunsuke



Nakayama Naoki



専務理事・副院長
高度脳血管病センター長
中山 若樹
■脳神経外科

Maruichi Katsuhiko



理事・副院長
診療技術部長
丸一 勝彦
■脳神経外科



Seamless Multi Access for Reliable Treatment

smart ER

Smart Emergency Room

画像診断部門と一体化し、
SCU・手術室と直結した機動的な救急部

4寝台収容可能で、最新の画像診断部門（CT・MRI・血管造影）と一体化、専用エレベータでSCU病棟および手術室とも直結した救急部です。感染専用室も完備し、さまざまな患者さんの受け入れに対応します。

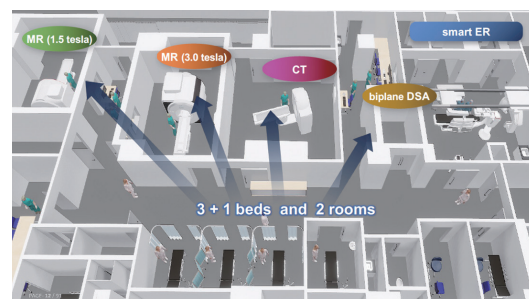


smart OR

Smart Operating Room

質の高い技術を支える
情報統合型のハイブリッド手術室

普及しつつあるハイブリッド手術室をさらに発展させた当院のsmart ORは、手術の精度を上げるための様々な科学的近代テクノロジーを、フル活用できるように設計しました。



Point 01

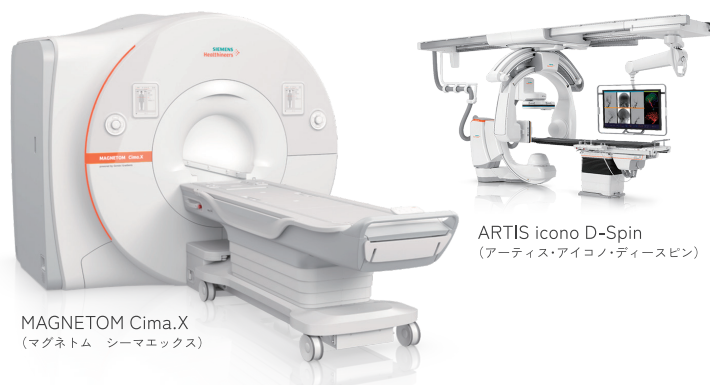
短縮された動線設計によってシームレスな医療を実現

緊急部は画像診断部門と一体化しており、複数の画像検査にもすぐに移動可能です。また手術室と直結する専用エレベーターにより、シームレスに患者さんを専門治療へと繋ぐことができます。救急外来へ搬送時に、複数の部屋・ベッドへ移動する際の負担を大きく軽減します。

Point 02

最先端の装置を導入した画像診断部門

最新の血管造影装置とCT、MRIは3台体制（うち1台は導入予定）院内併設の先端医療研究センターと共同で先進的な画像解析を実現します。



MAGNETOM Cima.X
(マグネトム シーマエックス)

ARTIS icono D-Spin
(アーティス・アイcono・ディースピン)



Point 03

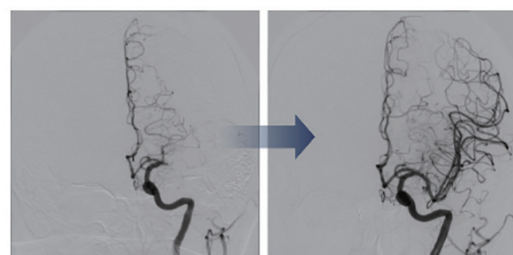
日本トップクラスの規模であるSCU24床を完備

救急専用エレベーターで2階に上がると、脳卒中ケアユニット（脳卒中集中治療室）があります。当院は日本脳卒中学会認定のPSCコア施設であり、SCU24床は全国でも屈指の規模を誇ります。MRI室、手術室、高気圧酸素治療室に隣接しているため、迅速かつ的確な治療をご提供できます。

これにより実現できること
Can be realized

秒単位の戦いである緊急性の高い治療に役立つ 機動的な救急救命

患者さんを移動させることなく診断と治療を同時並行で行う救急救命室＝ハイブリッドERがすでに日本でも普及しつつありますが、本smart ERでは救急初療室の目の前にCT装置とMRI装置、そして血管造影室を配置し、機動的な救急救命の実現を図ります。緊急性の高い脳血管内治療は秒単位で一刻を争う戦いです。スピード感ある救急救命は大きな強みになります。



Point 01 Lumina Bridge

マルチ・ハイブリッド・システム

3つある手術室のうち、主な2つの手術室の間の壁内にはCT装置が格納されており、両方の手術室で術中のCT撮影が可能な効率的な設計となっています。一方の手術室にはロボットアーム式のDSA装置が設置されており、術中の血管造影や血管内治療が行える環境が整っています。



ARTIS pheno EX
(アーティス・フィノ・イーエックス)

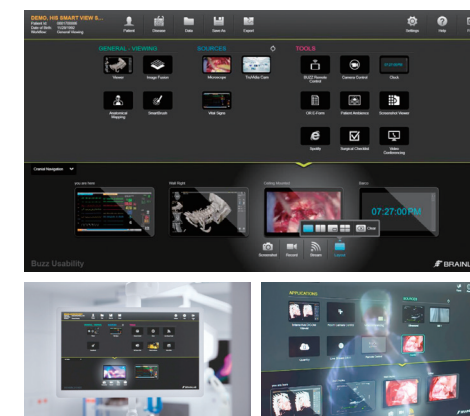


SOMATOM CT Sliding Gantry
(ソマトム・シーディー・スライディング・ガントリー)

Point 02 NexaVision

多角的な情報を司る マルチデジタル情報システム

術前に撮影されたCTやMRIをもとに、脳機能と解剖を反映した精密な3次元シミュレーション画像を手術室内で処理できる機能を導入しています。また、手術顕微鏡を用いたAR（拡張現実）によるナビゲーションも可能で、さまざまな画像や術中映像を多数のモニターで管理できるため、先進的かつ高度な手術に貢献します。



インテグレートビデオ IPシステム



大画面 LCD Video wall

これにより実現できること
Can be realized

手術クオリティの向上

手術のクオリティは、長年にわたる技術鍛錬と術中の精緻な熟慮に基づくものですが、当院のsmart ORでは画像診断装置のマルチアクセスとデジタル情報のマルチアクセスを実現し、手術の確実性と安全性を高めてくれます。術前の脳機能画像や3次元画像、術中ナビゲーション画像、そして手術自体の進行を、リアルタイムに連動させ、手術の緻密さを支

えます。そして術中の造影3次元CT撮影、摘出度確認の術中CT、術中の血管造影評価、ひいては術中の血管内塞栓術を容易に行うことで、安全な手術を実現します。





「人と医療と未来をつなぐ」という当院の想いを実現するため、
院内 院外の設備環境にこだわり抜き設計した病院です。

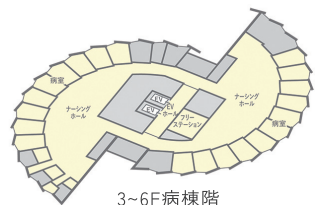
患者さんと職員をつなぐ



ナーシングホール

寄り添う看護を可能にする

地上7階建てのうち3～6階が病棟階になります。上から見ると柏の葉の
ように見える、半円を二つずらして合わせた形の病棟階デザインは当院



3～6F病棟階

の大きな特徴であり、見通しが効いて医療安全の面でも優れた構造で
す。医療者と患者さんを隔てる詰所
という概念を無くし、スタッフと患者
さんが身近な距離でコミュニケーションをとることができます。

患者さんと希望をつなぐ



エスポアホール

皆さんの希望であるように

1階エントランスから進むと、「エスポア ホール」があります。エスポアは
フランス語で「希望」を意味します。

患者さんにとっても職員にとってもこの病院が“希望”であることを願っ
ています。

患者さんと地域をつなぐ



ブランスクエア

患者さんの心を癒し、地域を守る、敷地内緑地

敷地内の広々とした緑地。患者さんの癒しや
屋外リハビリに利用されるだけでなく、地域住
民の憩いの場としても開放しています。災害時
には避難所としても機能し、人々を繋ぐ役割
を果たします。光の三原色が融合して白にな
ることから、仏語「ブラン(白)」と英語「スクエア
(広場)」を組み合わせています。



患者さんと未来をつなぐ



インフィニティールーム(リハビリテーション)

回復のためのインスピレーションを与える空間

広々としたリハビリエリア『インフィニティールーム』は、ブランスクエアと一体
化した開放感が特徴的な空間です。リハビリを通して患者さんが新たな
目標に向かって進むためのサポートをし、無限の可能性を感じられる環境
を提供します。

看護部について

救急から在宅までを支える 脳神経外科看護

「急性期」「回復期リハビリテーション」各病棟で、患者さんの病態に応じた脳神経外科領域の専門看護を提供しています。
適切かつ迅速な看護アプローチによって一人一人の患者さんの幸せとスムーズな社会復帰を目指します。

看護部の理念

その人らしさの探求

確かな知識と技術で 患者さんの 思いをかたちに



看護部長

小林 利絵子

各病棟では、医師、看護師、リハビリテーションスタッフ、薬剤師、
管理栄養士、医療ソーシャルワーカーなどの多職種が一つのチー
ムとなり、患者さんに最良の医療と看護を提供できるよう努めてい
ます。発病の時期から回復までの患者さんの心と体を支え、さらに
退院後もご自宅でその人らしく生活ができるように、確かな知識と
技術で患者さん一人一人の思いに寄り添った看護を展開しています。

病床数

許可病床
167床

脳卒中ケアユニット(24床)	3:1看護体制
3階病棟(37床)	13:1看護体制
4階病棟(37床)	13:1看護体制
5階病棟(36床)	10:1看護体制
6階病棟(33床)	10:1看護体制

看護単位

7看護単位 | 病棟5、外来、手術室

機能別体制

- 外来
- 脳卒中ケアユニット病床 24床
- 急性期一般病床 69床
- 回復期リハビリテーション病床 74床

看護要員

193人 | 非常勤、パート職員含む

(2025年4月1日現在)

リハビリテーション科

「患者さんの気持ちに寄り添い、信頼、尊敬の意を込めて、質の高いリハビリテーションを行います」という理念のもとに、
脳の様々な疾患に対し急性期から維持期までのリハビリテーションを提供しています。特に急性期・回復期は、365日途切
れないシームレスリハビリテーションを提供し、患者さんの身体機能・生活機能の回復につなげています。

当院のリハビリテーション機器

ウェルウォーク Welwalk

歩行の改善を目的とした歩行支援ロボットです。足の麻痺により歩行が不自由になっ
た方が、より自然な歩きを取得できるようにリハビリの初期段階から質・量ともに支援
します。



mediVR カグラ

VR(ヴァーチャルリアリティー)技術を応用したリハビリ用医療機器です。VR空間上
に表示される対象に向かって手を伸ばすという動作を繰り返すことによって脳の可塑性を
刺激し、脳内の情報伝達処理過程が整理されると考えられています。歩行機能、運動
失調症状、上肢機能、認知機能障害(高次脳機能障害や注意障害)、慢性疼痛、
めまい症などの症状改善に効果を示すことが報告されています。



MELTz 手指運動リハビリテーション システム

外骨格型のロボット装置で、AIが前腕の筋肉の電気信号(筋電)を分析し、患者さんが
行おうとする手の動きを認識し、ロボットが介助を行います。同じ動きを何度も正確に再
現することで、運動の再学習を促します。筋電が得られる中～重度の手指運動麻痺の
方に対して主に使用します。



ドライブシミュレーター Driving Simulator

運転再開の希望を持つ患者さんを対象に、ドライブシミュレーター(Honda セーフ
ティナビ)を用いて、運転に必要な高次脳機能・認知機能の評価を行っています。
社会復帰支援と交通事故の未然防止を目指します。



バイタルスティム VitalStim

脳卒中などの後遺症で嚥下機能に低下を認めた患者に対して、頸部への電気刺激に
より嚥下筋力の機能向上を図り、安全に食べられることを目指します。

